

2021 年 11 月

食料安全保障月報

(第 5 号)



令和 3 年 11 月 30 日

農林水産省

食料安全保障月報について

1 意義

我が国は食料の大半を海外に依存していることから、主食や飼料原料となる主要穀物(コメ、小麦、とうもろこし)及び大豆を中心に、その安定供給に向けて、世界の需給や価格動向を把握し、情報提供する目的で作成しています。

2 対象者

本月報は、2021年6月まで発行していた海外食料需給レポートに食料安全保障の観点から注目している事項を適宜追加する形で、国民のみなさま、特に、原料の大半を海外に依存する食品加工業者及び飼料製造業者等の方々に対し、安定的に原料調達を行う上での判断材料を提供する観点で作成しています。

3 重点記載事項

我が国が主に輸入している国や代替供給が可能な国、それに加えて我が国と輸入が競合する国に関し、国際相場や需給に影響を与える情報（生育状況や国内需要、貿易動向、価格、関連政策等）について重点的に記載しています。

4 公表頻度

月1回、月末を目処に公表します。

2021 年 11 月食料安全保障月報（第 5 号）

目 次

概要編

I	2021 年 11 月の主な動き	1
II	2021 年 11 月の穀物等の国際価格の動向	3
III	2021/22 年度の穀物需給（予測）のポイント	3
IV	2021/22 年度の油糧種子需給（予測）のポイント	3
V	今月の注目情報 米国の生産・輸出動向	4

（資料）

1	穀物等の国際価格の動向	8
2	穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移	9
3	穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、品目別）	10
4	加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の状況	12
5	FAO 食料価格指数の推移	16
6	食品小売価格の動向	17

品目別需給編

I	穀物	
1	小麦	1
	＜米国＞	2022/23 年度の冬小麦の播種進捗率が 94%
	＜カナダ＞	輸出価格は一時 2014 年以降最高の 432 ドル/トンに上昇
	＜豪州＞	2021/22 年度の収穫が開始、史上第 3 位の豊作見込み
	＜EU＞	2022/23 年度の冬小麦の播種が進展、発芽も開始
	＜中国＞	天候に恵まれ生産量は史上最高の見通し
	＜ロシア＞	生産量は単収の上昇により前月に比べ 2.0 百万トン上方修正
2	とうもろこし	8
	＜米国＞	収穫面積増、単収上方修正で生産量史上第 2 位、輸出減の見通し
	＜ブラジル＞	収穫面積増、単収増で生産量史上最高の見通し
	＜アルゼンチン＞	面積上方修正で生産量史上最高、輸出税は継続
	＜中国＞	収穫面積増、単収増で生産量史上最高、消費量も史上最高の見通し
3	コメ	13
	＜米国＞	史上最高の単収により生産量が上方修正
	＜インド＞	消費量の下方修正などにより期末在庫量が史上最高
	＜中国＞	輸入量が上方修正
	＜タイ＞	作付面積拡大予測の一方で洪水が発生
	＜ベトナム＞	秋冬作の収穫が始まるもコメ価格が高止まり

Ⅱ	油糧種子	
	大豆・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	19
	＜米国＞ 単収下方修正も生産量は史上第2位、輸出減の見通し	
	＜ブラジル＞ 収穫面積増で生産量は史上最高の見通し	
	＜アルゼンチン＞ 収穫面積は下方修正も増産見通し、輸出税は継続	
	＜中国＞ 収穫面積減で減産見通し、輸入量は1億トン	
	＜カナダ＞ 西部での高温乾燥の影響で減産見通し	

【利用上の注意】

表紙写真：米国アイオワ州のとうもろこしの収穫（10月21日撮影）。

(概要編)

I 2021 年 11 月の主な動き

主要穀物等の需給・相場等について

主要穀物等の 2021/22 年度の作況については、北半球はほぼ確定しつつあるが、これから収穫・作付けが行われる南半球は今後も変動する可能性。

品目別にみると、11 月の米国農務省 (USDA) の需給報告では、小麦については、生産量は史上最高となるものの、米国やカナダの減産に加え、世界の期末在庫量が下方修正されたこと等から、国際相場は高い水準で推移しており今後も注視が必要。

一方、大豆・とうもろこしについては、生産量が消費量を上回ると予想され、相場も史上最高水準にまで迫った 5 月頃と比較すれば一段落した感があるものの、期末在庫は依然としてタイトな状況であり、南半球の状況を中心に引き続き注視していく必要。

FAO (国連食糧農業機関) が公表している食料価格指数については、穀物及び植物油の上昇の影響を受け 3 か月連続で上昇し、最新値 (10 月) は 2011 年 7 月以来の最高値を記録。

海上運賃については、10 月以降、バルチック海運指数 (穀物輸送に主に使用される外航ばら積み船の運賃指数) は下落傾向が見られるものの、引き続き高い水準を維持。

早期注意段階の継続について

現状において、我が国の食料の安定供給に懸念は生じていないものの、上記の状況を踏まえ、2021 年 7 月から適用を開始した、緊急事態食料安全保障指針に基づく「早期注意段階」については、11 月も引き続き適用。

【参考】早期注意段階について (農林水産省 HP)

<https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/soukichuui.html>



1 ブラジルの大豆の作付けが順調に進展

9月以降、降雨に恵まれ、11月中旬には、大豆主産地の中西部のマット・グロッソ州では作付けが終了した。夏とうもろこしも主産地の南部のパラナ州では、11月上旬時点で作付けが概ね終了した。作付けは概ね順調である。ブラジル食料供給公社（CONAB）の11月レポートでは、穀物、油糧種子全体で2億8,980万トン、うち大豆が1億4,200万トン、とうもろこしは夏冬計で1億1,670万トンの生産見通しである。

写真：ブラジル マット・グロッソ州の大豆
天候に恵まれ順調に発芽(11月6日撮影)



なお、穀物輸送を担っている個人トラック運転手のストライキが燃料費の高騰から11月1日から計画されていた。しかし、例えば、ブラジリア連邦区では、燃料への商品サービス流通税（ICMS）の課税を90日間凍結するなど、燃料費高騰の緩和措置を行うことと引き換えに、連邦政府が法的措置でストライキ防止策を講じたことから、穀物輸送には大きな影響は出なかったとみられる。

2 ウクライナの豊作と小麦の輸出上限数量の設定

2021/22年度の小麦、とうもろこし等の収穫が終了した。天候に恵まれたことから、穀物・油糧種子全体で1億トンを超える穀物の収穫が見込まれている。USDAの11月見通しでは、特に冬作が中心の小麦は史上最高の3,300万トン、とうもろこしも史上最高の3,800万トン、大麦も過去10年では最大の1,020万トンの生産量が見込まれている。

小麦については、10月19日に2021/22年度の輸出上限数量は2,530万トンで政府と穀物関係業界が合意した。前年度の1,750万トンと比較して小麦の豊作を受け大幅に増枠となった。一方、とうもろこしについてはまだ公表されていないが、輸出量は中国向けを中心に大きく増加するとみられ、USDAの11月見通しでは輸出量は3,150万トンと見込まれている。

3 インドの増産、輸出増とコメ（インディカ種）の国際価格の下落

USDAの11月見通しによれば、2021/22年度のコメの生産量は、降雨に恵まれ、史上最高の1億2,500万トンと見込まれている。これを受け、輸出量は過去最高の前年度の2,000万トンに続き、2021/22年度も1,900万トンが見込まれている。豊富な生産量と輸出余力から、インド産米の輸出価格は、他の東南アジアの輸出国と比べて価格競争力があるため、サブサハラ・アフリカ諸国向け輸出も増加している。

この結果、タイ産米（インディカ種）の国際価格も、インド産米の低価格での輸出に加え、10月のタイ北東部の降雨や、コンテナ運賃の高騰などの要因もあり、本年の前半と比べて小麦などの他の穀物と異なり下落している。

Ⅱ 2021 年 11 月の穀物等の国際価格の動向

小麦は、10月末、280ドル/トン台前半で推移。11月に入り、旺盛な輸入需要により一時290ドル/トン台前半に上昇したものの、ドル高や米国産春小麦相場の下落から280ドル/トン台前半に値を下げた。その後、USDAの11月需給報告で世界の小麦在庫量が下方修正されたことやロシアの輸出規制強化の懸念による供給逼迫感、旺盛な輸入需要から値を上げ、11月下旬現在、300ドル/トン台前半で推移。

とうもろこしは、10月末、220ドル/トン台前半で推移。11月に入り、原油相場の下落や南米の順調な作付け進展等から210ドル/トン台後半まで値を下げた。その後、米国の収穫が無事に終盤を迎えたことで上値は抑えられたものの、小麦や大豆価格の上昇に追随し値を上げ、11月下旬現在、220ドル/トン台半ばで推移。

コメは、10月末、410ドル/トン台後半で推移。11月に入り、バーツ安により410ドル/トン台前半まで値を下げた後、バーツ高により11月中旬にかけて410ドル/トン台後半まで値を上げ、12月に新穀が市場に出回るのを待つ姿勢が強く、その後横ばいで推移し、11月下旬現在も410ドル/トン台後半で推移。

大豆は、10月末、450ドル/トン台半ばで推移。11月に入り、原油相場の下落や南米の順調な作付け進展等から430ドル/トン台前半まで値を下げた。その後、米国の収穫が無事に終盤を迎えたことで上値は抑えられたものの、USDAの11月需給報告で米国大豆の単収予測の想定外の下方修正や大豆圧搾高の伸び、小麦や大豆粕価格上昇への追随により値を上げ、11月下旬現在、460ドル/トン台半ばで推移。

(注) 小麦、とうもろこし、大豆はシカゴ相場（期近物）、米はタイ国家貿易委員会価格

Ⅲ 2021/22 年度の穀物需給（予測）のポイント

世界の穀物全体の生産量は、前月から 550 万トン上方修正され 27.9 億トン。消費量は、前月から 390 万トン上方修正され 27.9 億トン となり、生産量が消費量を下回る見込み。

また、期末在庫率は前年度を下回り 28.4%となる見込み（資料 2 参照）。

生産量は、前月予測から、小麦で下方修正、とうもろこし、コメで上方修正され、穀物全体で上方修正され 27.9 億トンの見込み。

消費量は、前月予測から、小麦、とうもろこしで上方修正、コメで下方修正され、穀物全体で上方修正され 27.9 億トンの見込み。

貿易量は、前月予測から、小麦、とうもろこしで上方修正、コメで下方修正され、5.0 億トンの見込み。

期末在庫量は、7.9 億トンと前月予測から上方修正、期末在庫率は前月から上方修正された。

(注：数値は 11 月の USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」による)

Ⅳ 2021/22 年度の油糧種子需給(予測)のポイント

油糧種子全体の生産量は前年度を上回り 6.3 億トン。消費量は前年度を上回り 6.2 億トン となり、生産量が消費量を上回る見込み。

なお、期末在庫率は前年度を上回り、18.5%となる見込み。

(注：数値は 11 月の USDA「Oilseeds : World Markets and Trade」による)

V 今月の注目情報：米国の生産・輸出動向

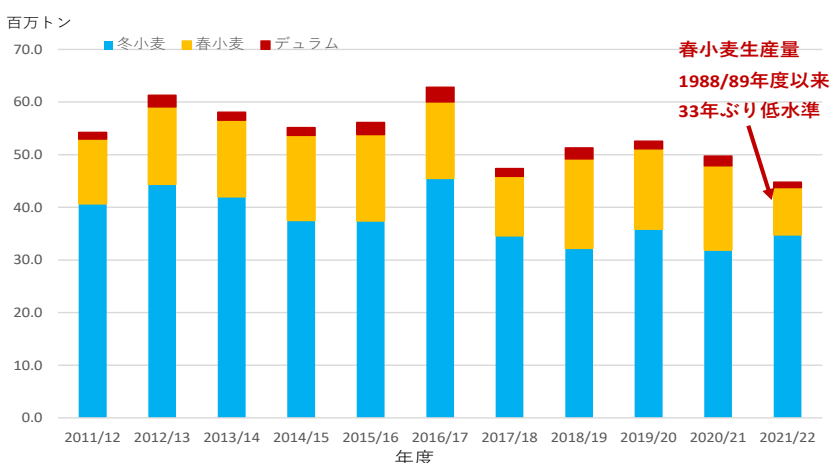
米国の2021/22年度のとうもろこし、大豆の収穫は終盤を迎え、とうもろこし、大豆ともに史上2番目の生産量が見込まれている。一方、収穫がすでに終了している小麦は、春小麦が高温乾燥の影響を受け、前年度より1割減産となり、2022/23年度の冬小麦の生育も一部で乾燥の懸念がある。一方、とうもろこし、大豆の期末在庫率は、多少改善したものの、原油価格の高騰によるとうもろこし、大豆のバイオ燃料向け需要の増加もあり、依然低水準である。最近の米国の状況をまとめた。

1 生産動向

(1) 小麦：春小麦が高温乾燥の影響を受け、小麦全体で18年ぶりの低水準

米国農務省(USDA)の11月見通しによれば、2021/22年度の収穫は終了した。冬小麦は前年度より増産の3,480万トンとなったが、春小麦・デュラム小麦は、高温乾燥の影響を受け、大幅に減産となった。デュラム小麦を除く春小麦は1988/89年度以来33年ぶりの低水準の900万トン、デュラム小麦は1961/62年度以来60年ぶりの低水準の100万トンとなり、合計で対前年度

図1 小麦の生産量の推移。小麦全体では18年ぶりの低水準



比10%減の4,480万トンの見通し。資料：USDA「Crop production」(2021.11)を農林水産省で加工
これは2002/03年度以来18年ぶりの低水準となった。

なお、2022/23年度の冬小麦については、11月14日時点で、作付進捗率が94%と概ね終了し、発芽進捗率は81%となっており、今後休眠期を迎えるとみられる。米国北部では、土壌水分不足による懸念があるものの、他の地域ではおおむね生育状況は良好とみられる。

(2) とうもろこし：史上2番目の豊作

収穫は11月中旬現在で終盤を迎えており、USDAの11月見通しによれば、2021/22年度は、北西部で高温乾燥の影響はあったものの、主産地は天候に恵まれ、単収は史上最高の11.11トン/ヘクタールとなり、生産量も前年度より6.7%増で、過去最高の2016/17年度に次ぐ3億8,260万トンとなる見通しである。

(3) 大豆：史上2番目の豊作

とうもろこしと同様に、収穫は終盤を迎えており、同11月見通しによれば、2021/22年度は、北西部で高温乾燥の影響はあったものの、主産地は天候に恵まれ、生産量も前年度より4.9%増で、過去最高の2018/19年度に次ぐ1億2,040万トンとなる見通しである。

2 国内需要と輸出動向

(1) 小麦需要は増加、価格は上昇

小麦は、飼料用需要の増加に加え、価格高騰による 2022/23 年産の作付意欲の増加により、種子用需要が増加し、全体で 3.9%増加する見通しである。

また、小麦価格の上昇に伴い、小麦加工品の価格も上昇している。USDA「Wheat Outlook」(2021.11)によれば、2021年9月の小麦粉の製粉工場出荷価格は前年9月より28%上昇しており、パンなどの小麦加工品の小売価格は同時期で2～4%上昇している。なお、食品全体の小売価格は同時期と比較すると4.6%上昇しており、小麦価格の上昇よりは肉や卵製品の価格上昇分の寄与度が大きいとしている。なお、2021年10月のHRS(ハードレッドスプリング)のPNW(太平洋北西岸)からの輸出価格は前年10月の290ドル/トンから427ドル/トンへ46%上昇している。

(2) とうもろこし、大豆のバイオ燃料向け需要増

とうもろこしは、夏以降のとうもろこし価格の下落に加え、最近の原油価格高騰に伴うガソリン価格の上昇で、ガソリンへのバイオ燃料の混合に関するエタノール生産のマージンの高まりなどから、USDAの11月見通しで、2021/22年度のバイオ燃料向け需要が上方修正された。前年度と比較し、バイオ燃料向け需要は4.4%増と大きく拡大し、とうもろこし全体で需要量は2.2%増加の見通しである。

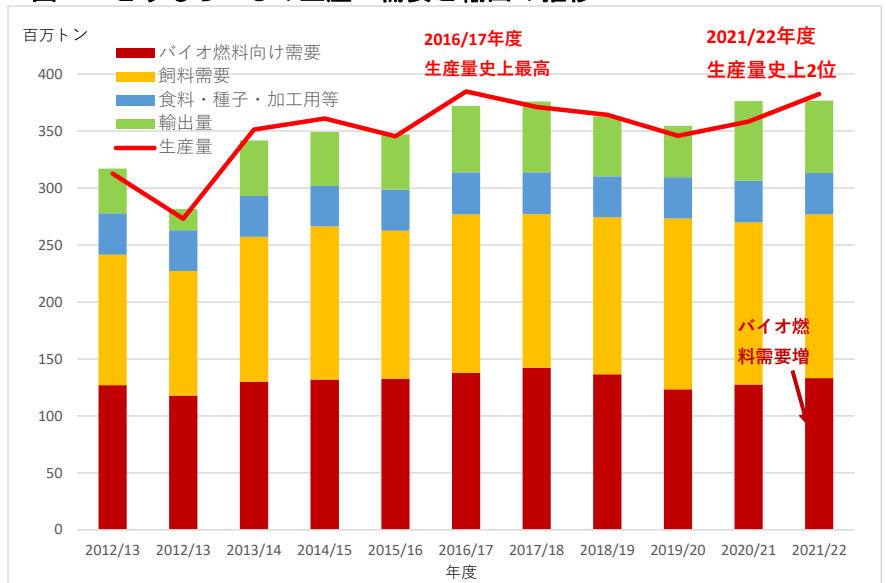
大豆も、2021/22年度の搾油量は2.3%増加し、大豆油のバイオ燃料向け需要は24%増加する見通しである。

(3) 輸出の減少

USDAの11月見通しによれば、2021/22年度の小麦、とうもろこし、大豆の輸出量は、前年度より減少し、それぞれ、2,340万トン、6,350万トン、5,580万トンとなる見込みである。小麦

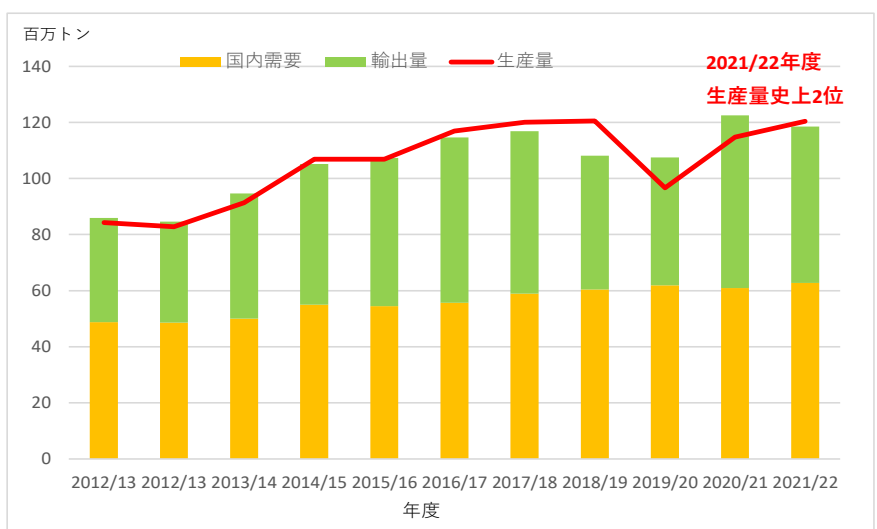
や大豆については、輸出ペースの鈍化から11月見通しで下方修正された。

図2 とうもろこしの生産・需要と輸出の推移



資料：USDA「PS&D」(2021.11)を農林水産省で加工

図3 大豆の生産、需要と輸出の推移



資料：USDA「PS&D」(2021.11)を農林水産省で加工

3 依然低水準の在庫と物流コスト増加

米国のとうもろこし、大豆

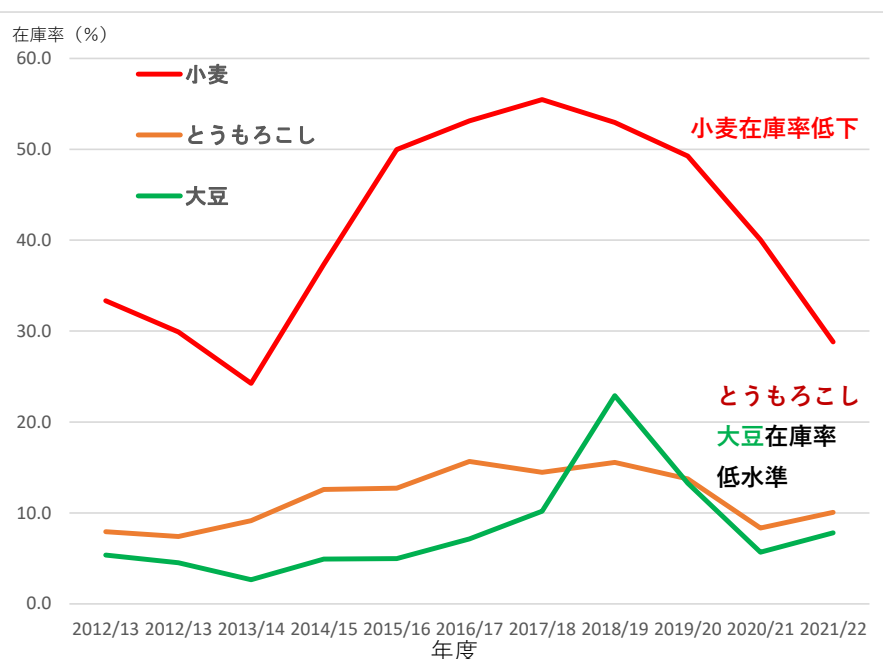
とも史上最高レベルの生産量が見込まれているが、2021/22 年度の期末在庫率については、前年度よりは回復するものの、とうもろこしは 10.1%、大豆は 7.8%と過去 5 年と比較しても低水準となっている。小麦の期末在庫率は春小麦の減産が響き、前年度の 40.0%から 28.8%まで低下する見通しである。

物流に関しては、8 月末のハリケーンの襲来による米国ガルフの穀物輸出施設への影響については、一部を除き、輸出施設の損傷箇所が修復されたこともあり、影響は最小限にとどまるとみられる。一方、コロナの影響からの世界の経済回復から高騰していたフレートに関しては、北米西海岸を中心にコンテナ物流が混乱している中、今後を見通すことは難しいが、原油価格が上昇した場合、さらに上昇する可能性がある。

こうした中、米国産穀物の輸入に関しては、減産となった小麦だけでなく、豊作となったとうもろこしや大豆に関しても、コストが上昇する可能性をはらんでいる。

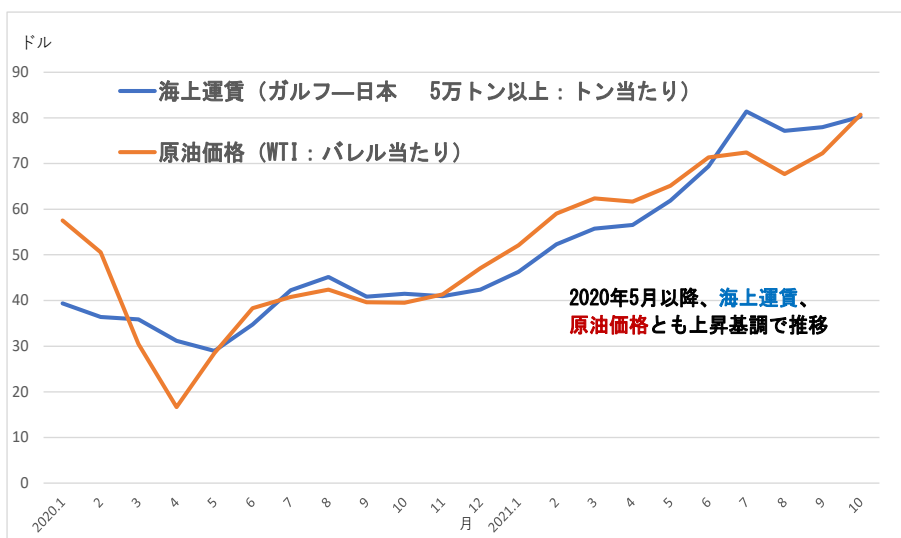
加えて、大手不動産企業等の経営問題などで先行きが不透明な中国経済の動向など不確定要素がある中、南米の作物の生育に影響を与える傾向があるといわれているラニーニャ現象が発生したとみられている。これらのことから、米国の穀物の期末在庫率が比較的低水準であることを踏まえると、南米の生産状況によっては穀物相場が再び上昇する可能性をはらんでおり、引き続き注視が必要である。

図 4 米国の小麦、とうもろこし、大豆の在庫率の推移



資料：USDA「PS&D」(2021. 11)を農林水産省で加工

図 5 最近の海上運賃と原油価格の推移



資料：海上運賃：国際穀物理事会資料、原油価格：内閣府「海外経済データ」

カナダ西部の11月中旬の洪水による穀物輸出への影響について

カナダでは、平原州（マニトバ・サスカチュワン・アルバータ）で生産された、小麦や菜種、大麦等が、鉄道で太平洋岸のブリティッシュ・コロンビア州のカナダ最大の港のバンクーバー港へ運ばれ、我が国を始めとするアジア諸国など向けへ輸出されている。

報道等によると、11月13日から14日にかけてブリティッシュ・コロンビア州で豪雨に見舞われ、洪水や土砂崩れが発生。

これにより、バンクーバー港に通じる幹線道路が閉鎖、鉄道大手2社カナディアン・パシフィック・レールウェイ（CP）、カナディアン・ナショナル・レールウェイ（CN）も被害を受け運行が停止された。

その後、CP、CNとも23日以降に復旧し、順次運行を再開したが、小麦や菜種、大麦等の輸出が一時的に遅延する等影響がある模様。

図1 北米の11月前半の降水量（JASMAI データより）

カナダ西部太平洋岸から米国太平洋北西岸にかけ 300 ミリ以上の降雨

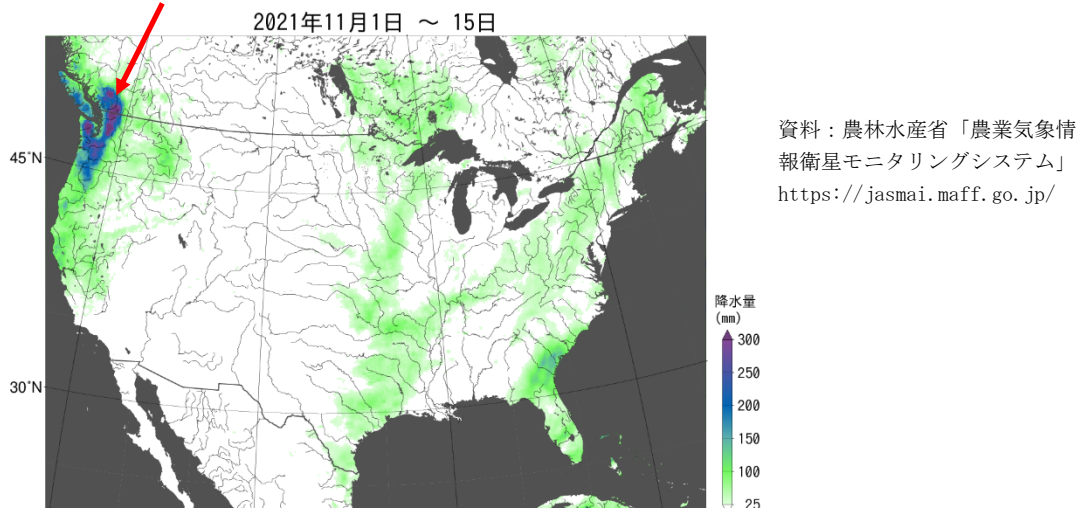
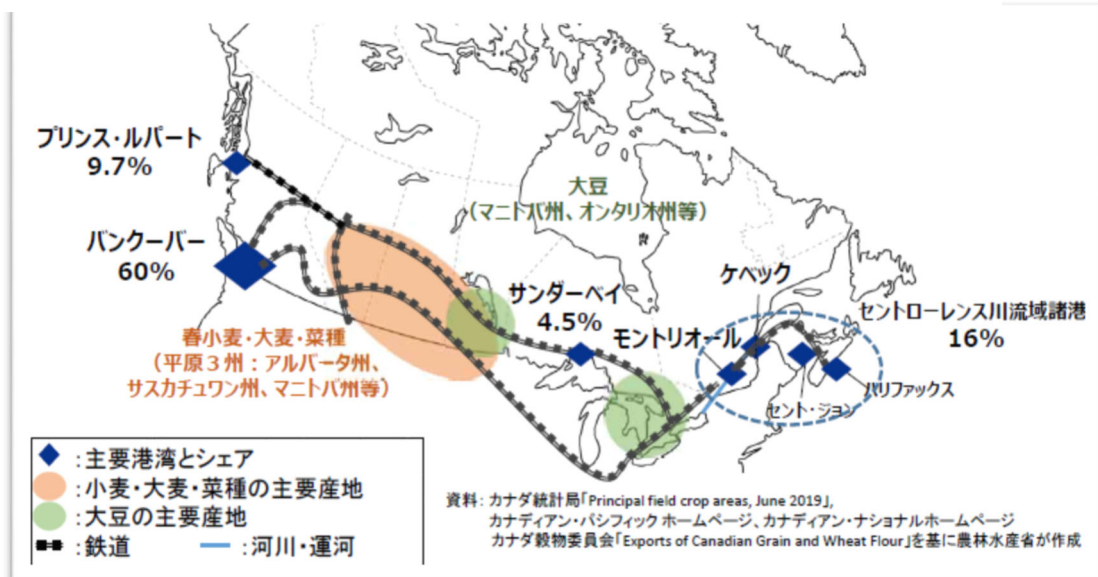


図2 カナダの穀物輸出時の輸送経路

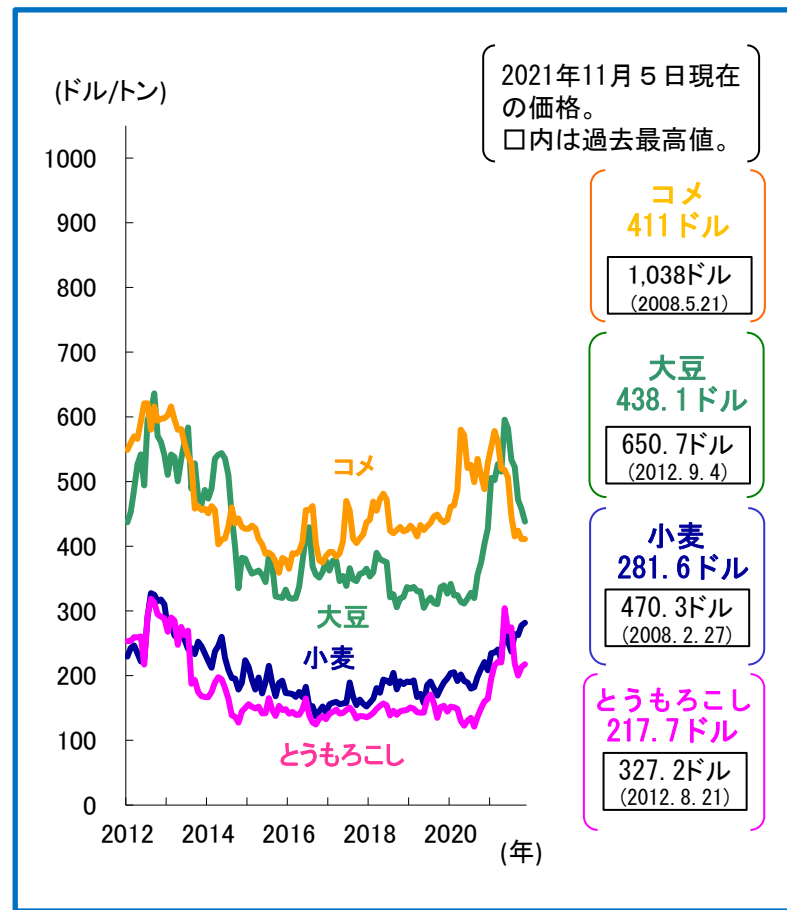
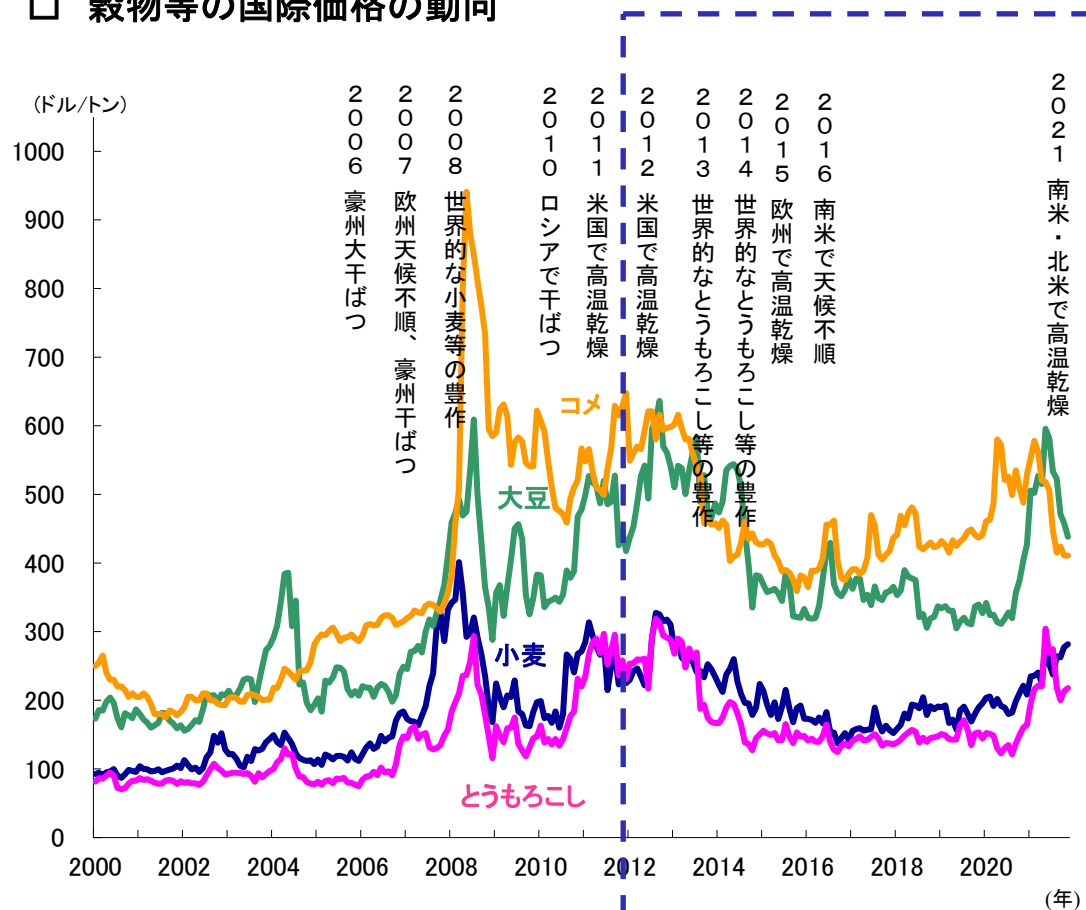


資料 1 穀物等の国際価格の動向（ドル/トン）

○とうもろこし、大豆が史上最高値を記録した2012年以降、世界的な豊作等から穀物等価格は低下。2017年以降ほぼ横ばいで推移も、2020年後半から南米の乾燥、中国の輸入需要の増加、2021年の北米の北部の高温乾燥等により上昇。コメは、2013年以降低下も2020年ベトナムの輸出枠設定や2021年初頭のコンテナ不足等で一時的に上昇。2021年2月半ばから海外需要低迷で低下。

○なお、穀物等価格は、新興国の畜産物消費の増加を背景とした堅調な需要やエネルギー向け需要により、2008年以前を上回る水準で推移している。

□ 穀物等の国際価格の動向



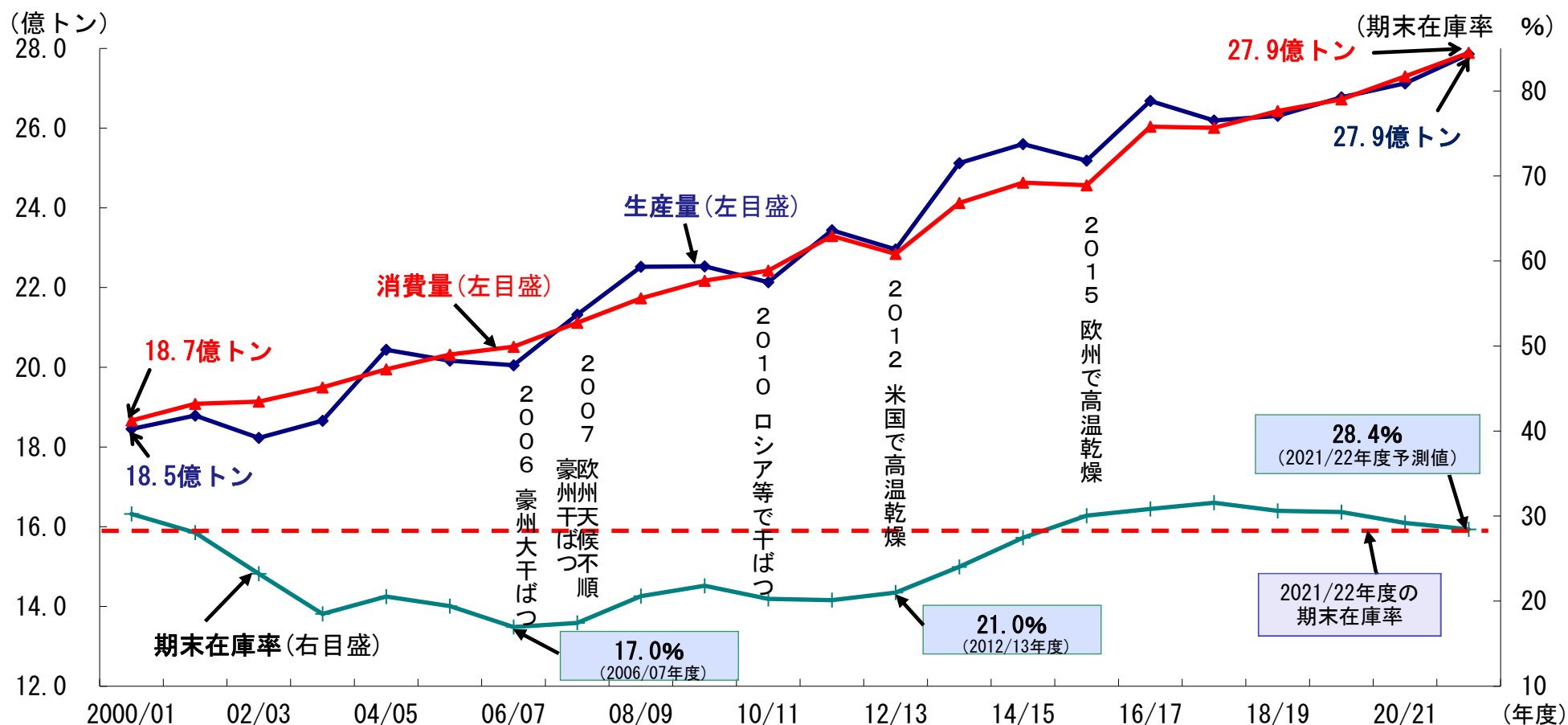
注1：小麦、とうもろこし、大豆は、シカゴ商品取引所の各月第1金曜日の期近終値の価格（セツルメント）である。コメは、タイ国家貿易取引委員会公表による各月第1水曜日のタイうるち精米100%2等のFOB価格である。

注2：過去最高価格については、コメはタイ国家貿易取引委員会の公表する価格の最高価格、コメ以外はシカゴ商品取引所の全ての取引日における期近終値の最高価格。

資料2 穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移

- 世界の穀物消費量は、途上国の人口増、所得水準の向上等に伴い増加傾向で推移。2021/22年度は、2000/01年度に比べ1.5倍の水準に増加。一方、生産量は、主に単収の伸びにより消費量の増加に対応している。
- 2021/22年度の期末在庫率は、生産量が消費量を下回り、前年度より低下し、28.4%。直近の価格高騰年の2012/13年度(21.0%)を上回る見込み。

□ 穀物(コメ、とうもろこし、小麦、大麦等)の需給の推移

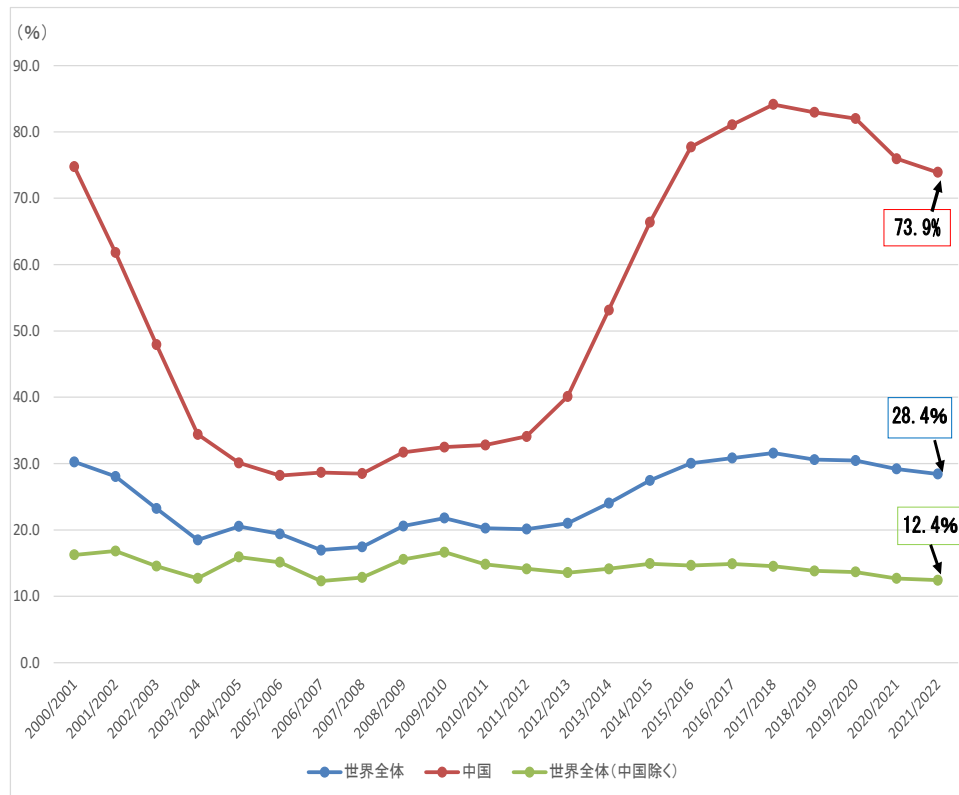


資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(November 2021)、「PS&D」

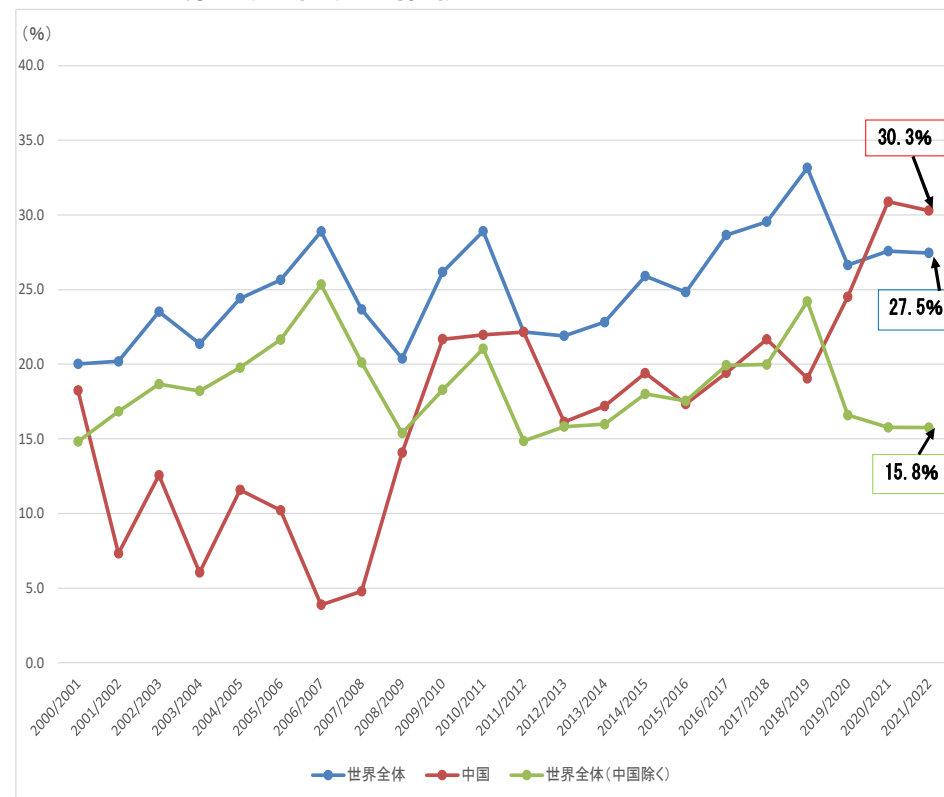
(注) なお、「PS&D」については、最新の公表データを使用している。

資料 3-1 穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、大豆）

○ 穀物全体の期末在庫率の推移



○ 大豆の期末在庫率の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(November 9, 2021)

注: 1) 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等(大豆除く)。

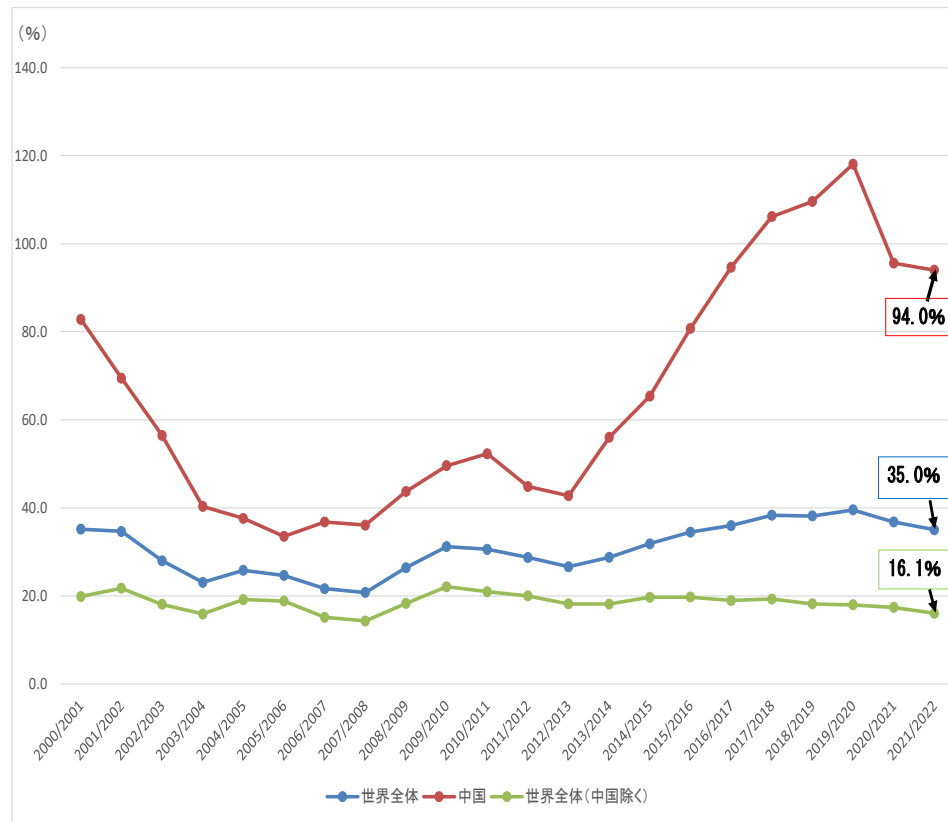
2) 世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / (消費量 + 輸出量 - 輸入量) × 100 ※ただし大豆については、世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / 消費量 × 100

3) 中国の期末在庫率(%) = 中国の期末在庫量 / (中国の消費量 + 中国の輸出量) × 100

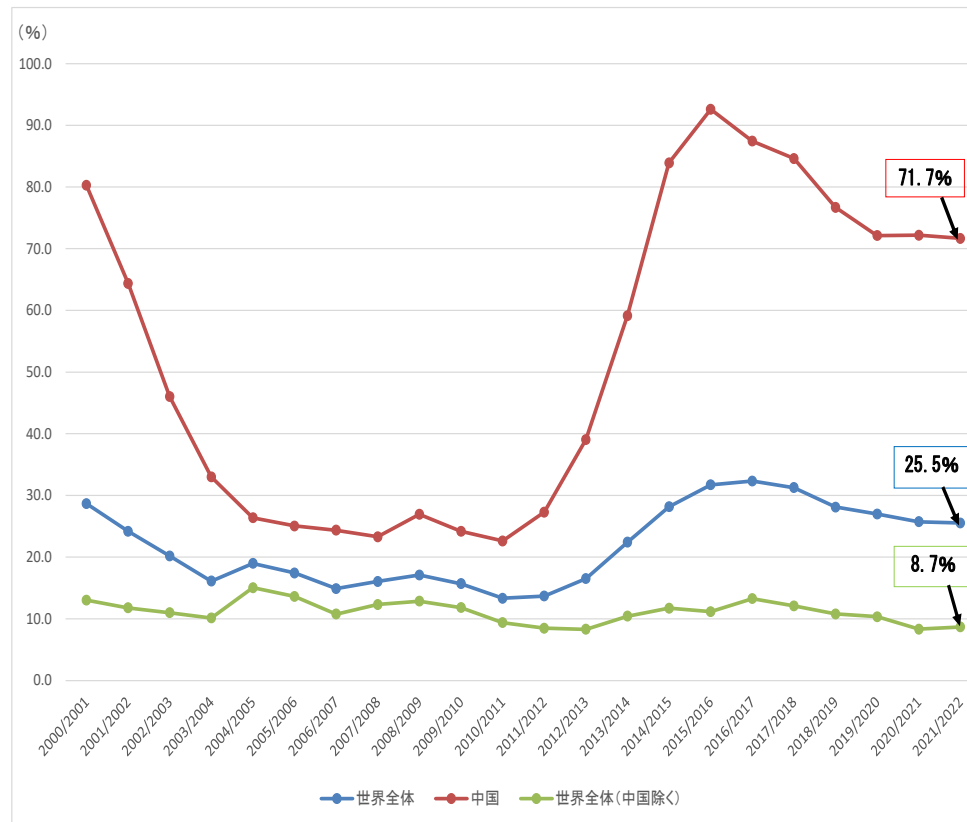
4) 中国除く期末在庫率(%) = 中国除く期末在庫量 / (中国除く消費量 + 中国除く輸出量) × 100

資料 3-2 穀物等の期末在庫率の推移（小麦、とうもろこし）

○ 小麦の期末在庫率の推移



○ とうもろこしの期末在庫率の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(November 9, 2021)

注: 1)小麦は、小麦及び小麦粉(小麦換算)の計。

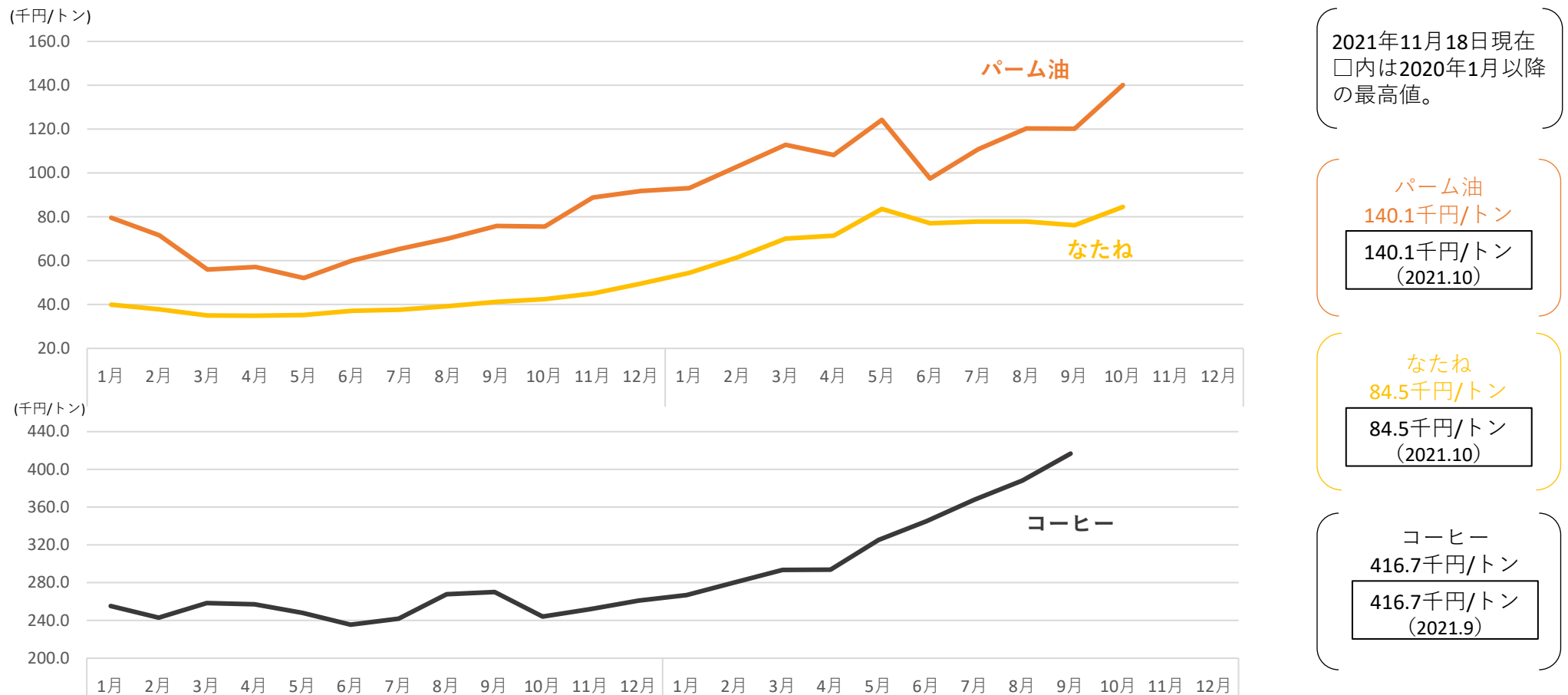
2)世界の期末在庫率(%)=期末在庫量/(消費量+輸出量-輸入量)×100

3)中国の期末在庫率(%)=中国の期末在庫量/(中国の消費量+中国の輸出量)×100

4)中国除く期末在庫率(%)=中国除く期末在庫量/(中国除く消費量+中国除く輸出量)×100

資料４－１ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の動向

- なたね、パーム油について、需要の面では世界的な人口増加や中国等における所得水準の向上による食用油需要の拡大、エネルギー向け需要の増加などが価格に影響を及ぼしている。
- 供給面では、なたねについて、主産地であるカナダでの高温、乾燥の影響により、減産と品質の低下が見られる。パーム油については、新型コロナウイルスの感染拡大による労働力不足により、主産地であるマレーシアにおいて、収穫作業が進まず、減産傾向となっている。
- コーヒーについて、世界最大の生産国であるブラジルの天候不順や世界的な物流の混乱等供給不足への懸念が強まったこと、需要面ではワクチン接種による経済活動の回復からコーヒー消費量が増加したことが価格に影響を及ぼしている。

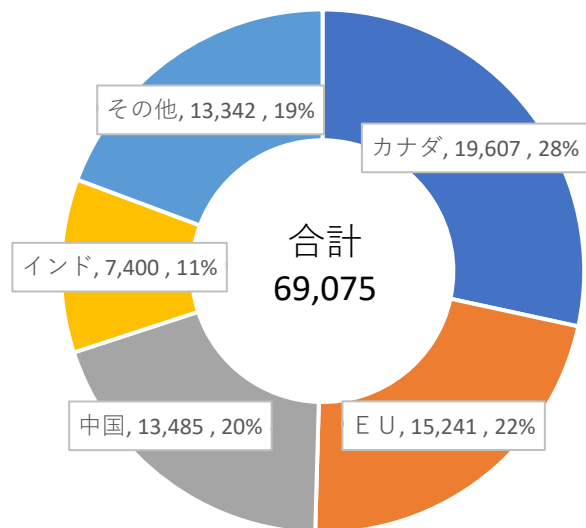


※ なたねの国際価格についてはカナダウィニペグ菜種市場の先物価格（期近物）を、パーム油の国際価格についてはマレーシアパーム油市場の先物価格（期近物）を、コーヒーの国際価格については国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均を用い、為替レートから円に換算して算出。

資料４－２ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の生産量及び輸入先

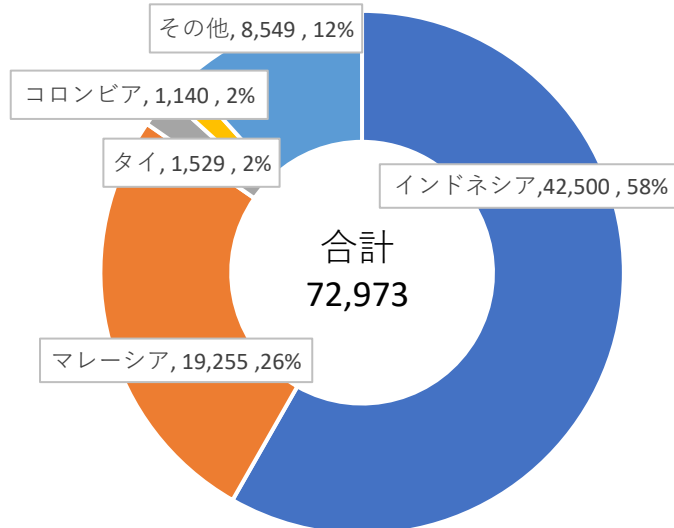
○主要生産国の生産状況

なたね生産量（2019/20）
（単位：千トン）



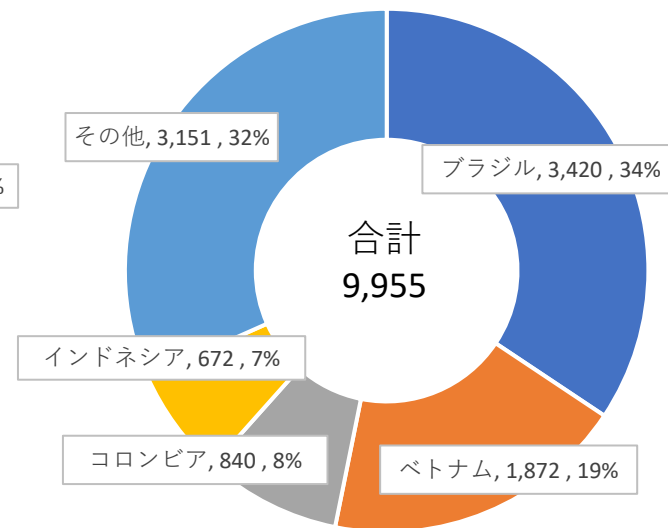
※米国農務省穀物等需給報告

パーム油生産量（2019/20）
（単位：千トン）



※米国農務省穀物等需給報告

コーヒー生産量（2019）
（単位：千トン）



※国際コーヒー機関（ICO）統計資料

○我が国の主な輸入先の状況（単位：千トン（2020年））

なたね	輸入量	割合
カナダ	2,194	97.4%
オーストラリア	59	2.6%
その他	0	0.0%
合計	2,252	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1205）

パーム油	輸入量	割合
マレーシア	447	58.8%
インドネシア	313	41.2%
その他	0	0.0%
合計	761	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1511）

コーヒー	輸入量	割合
ブラジル	117	29.4%
ベトナム	101	25.2%
コロンビア	61	15.2%
その他	120	30.2%
合計	399	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：0901.11-22）

資料４－３ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移①

①なたね

単位（千円/トン）

	2020年												2021年											
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
なたね	39.9	37.8	35.0	34.9	35.2	37.1	37.6	39.2	41.2	42.5	45.0	49.5	54.4	61.5	70.0	71.4	83.6	77.0	77.8	77.9	76.2	84.5		
前月比	103.9	94.7	92.6	99.7	100.9	105.4	101.4	104.2	105.1	103.0	106.1	110.0	109.9	113.0	113.9	101.9	117.1	92.2	101.1	100.0	97.8	111.0		
前年同月比	101.0	94.9	91.6	92.1	98.4	101.8	102.0	109.7	112.6	112.3	119.6	128.9	136.4	162.7	200.1	204.6	237.4	207.6	206.9	198.5	184.9	199.2		

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 カナダウィニペグなたね定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

②パーム油

単位（千円/トン）

	2020年												2021年											
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
パーム油	79.5	71.6	55.9	57.1	52.1	60.0	65.4	70.1	75.8	75.5	88.8	91.8	93.1	102.9	112.9	108.2	124.2	97.4	110.8	120.3	120.1	140.1		
前月比	105.5	90.0	78.2	102.1	91.1	115.3	109.0	107.2	108.1	99.6	117.6	103.4	101.4	110.6	109.7	95.9	114.8	78.4	113.8	108.5	99.9	116.6		
前年同月比	134.5	115.7	96.0	100.0	98.9	115.0	129.8	129.3	131.9	135.9	134.6	121.7	117.0	143.8	201.8	189.4	238.6	162.3	169.4	171.5	158.4	185.5		

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 マレーシアパーム油定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

資料 4－4 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移②

③ コーヒー

単位（千円/トン）

	2020年												2021年											
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
コーヒー	255.2	242.8	258.3	257.1	247.9	235.5	241.8	267.7	270.0	244.0	251.9	260.9	266.8	280.2	293.5	293.7	325.2	345.1	367.9	388.1	416.7			
前月比	90.9	95.2	106.4	99.5	96.4	95.0	102.7	110.7	100.9	90.4	103.3	103.6	102.3	105.0	104.7	100.1	110.7	106.1	106.6	105.5	107.4			
前年同月比	104.8	98.3	108.5	111.0	111.4	99.1	98.0	119.0	116.0	105.3	97.4	92.9	104.6	115.4	113.6	114.2	131.2	146.6	152.2	145.0	154.3			

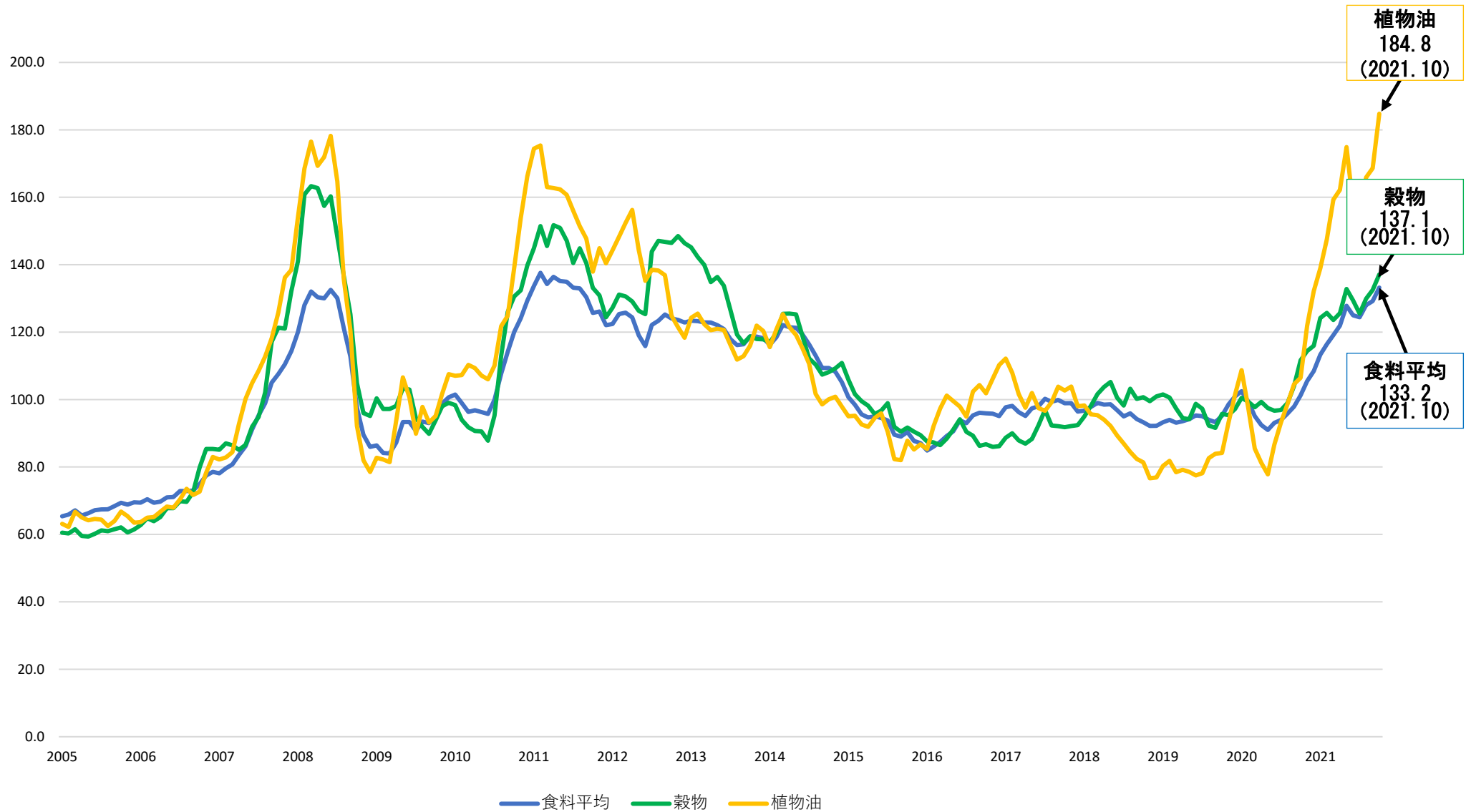
大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均から算出

2 ICO複合指標価格は、米国、ドイツ、フランスの3大市場の現物の成約価格を収集しICOの定める方法で4品種ごとの加重平均値を算出したもの。

資料5 FAO食料価格指数

(2014-16平均=100)



資料: FAO「Food Price Index」(2021.11)より作成

注: 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等、植物油は大豆油、菜種油、ひまわり油、パーム油等

資料6 食品小売価格の動向

○ 令和3年10月の国内の加工食品の消費者物価指数は99.2～112.4（前年同月比で－2.0%～18.2%）の範囲内。

消費者物価指数（総務省） （令和3年5月～令和3年10月）

	H28	H29	H30	H31 (R元)	R2	R3						
品目	平均	平均	平均	平均	平均	5月	6月	7月	8月	9月	10月	上昇率 (前年 同月比)
食パン	99.9	99.6	100.2	101.1	100.0	98.3	99.0	99.3	99.4	99.3	99.6	-0.2%
即席めん	96.2	95.7	95.3	98.5	100.0	99.7	99.0	100.4	100.2	99.6	100.9	1.3%
豆腐	98.1	98.6	98.8	99.1	100.0	101.0	100.8	101.0	100.8	101.6	102.0	1.4%
食用油 (キャノーラ油)	106.3	102.7	101.5	100.9	100.0	99.4	102.3	103.9	107.9	113.9	118.1	18.2%
みそ	97.1	96.9	97.4	99.1	100.0	100.0	98.6	99.5	98.9	100.0	99.2	-1.3%
マヨネーズ	103.8	102.3	100.8	100.7	100.0	100.6	100.0	108.6	110.2	111.2	112.4	12.5%
チーズ	97.7	97.3	100.9	101.3	100.0	97.9	96.5	98.7	100.6	100.6	98.4	-2.0%
バター	99.0	99.3	99.5	99.9	100.0	99.9	99.9	99.9	99.8	99.9	99.9	-0.6%
生鮮食品を 除く食料	96.1	97.0	97.9	99.0	100.0	100.0	100.0	100.1	100.1	100.4	100.7	0.7%

注1：令和2年の平均値を100とした指数で表記。

【参考】 食品価格動向調査（農林水産省） （令和3年5月～令和3年11月）

	H28	H29	H30	H31 (R元)	R2	R3										
品目	平均	平均	平均	平均	平均	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	上昇率 (前月比)	上昇率 (前年 同月比)	
食パン	99.0	97.6	97.9	101.3	100.0	98.6	98.0	98.4	97.8	97.5	98.8	98.6	98.2	-0.4%	-1.5%	
即席めん	92.8	92.6	92.4	97.9	100.0	99.6	99.6	99.6	99.0	99.0	99.0	99.0	99.0	0.0%	-0.6%	
豆腐	102.2	100.8	100.1	100.9	100.0	98.5	99.4	100.3	100.3	101.1	105.0	100.7	101.1	0.4%	1.7%	
食用油 (キャノーラ油)	99.6	97.9	97.9	103.5	100.0	98.8	98.2	100.1	100.7	106.1	109.0	112.8	115.3	2.2%	15.9%	
みそ	90.3	91.9	96.6	100.4	100.0	98.4	99.4	99.8	98.1	99.0	102.7	98.4	98.8	0.4%	-0.6%	
マヨネーズ	99.9	99.1	97.9	103.1	100.0	97.7	97.7	99.0	104.5	105.9	106.6	106.6	106.6	0.0%	8.0%	
チーズ	95.5	95.2	98.6	100.9	100.0	99.1	98.6	93.1	99.5	99.1	103.0	98.6	93.6	-5.1%	-6.9%	
バター	98.2	98.8	99.0	99.5	100.0	99.7	99.5	99.7	99.5	99.5	99.5	99.9	99.7	-0.2%	-0.2%	

注1：令和2年の平均値を100とした指数で表記。

注2：調査は原則、各都道府県10店舗で実施。平成30年9月までは週1回、同年10月以降は月1回実施。

注3：調査結果は調査期間中の平均値で算出。

注4：令和2年4～5月、令和3年1～3月、同5～9月については、新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言の対象都道府県においては調査を中止。そのためそれぞれ前月の値とは接続しない。